

学習オリエンテーション 資料

— 目次 —

英語科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p1 ~ p2
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p2 ~ p3
数学科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p4
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p4 ~ p6
国語科より	【古文】 1.ご用意いただくものと配付するもの	p7
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p7 ~ p9
	【現代文】 1.ご用意いただくものと配付するもの	p9
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p9 ~ p10
(参考)	受験科目「国語」の性質と長期的展望の必要性	p10~ p11

英語科より

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□ 授業用ノート：罫線の引いてある市販の大学ノート

添削を先生に頼む場合がありますので、ルーズリーフが便利です(先生の筋力にも限界が…)。
4本線が引いてある『ローマ字練習帳』を用いるのは中1までを目安と考えてください。

□ ファイルやホルダ：プリントを収納するための市販のもの

毎回、複数の B4 か B5 の演習プリントが配付されます。以下のいずれかの方法で整理してください。(Amazon.co.jp などですべての言葉を検索すると比較検討し易いと思います。)

- ・「**ポケットファイル**」に入れる：20 ポケットのものを用意し、一回分を1ポケットに収納すれば1年間で3冊で済みますが、復習するときにポケットから出さなければいけないのが難点です。
- ・授業用ノートにプリントを糊やテープで貼り付ける：余白にメモを取るようにすれば、これだけを使って復習することが可能ですが、貼り付ける手間がかかります。
- ・「**穴あけパンチ**」でプリントに穴をあけ「**ファイル**」で綴じる：「穴あけパンチ」が2穴であれば「2穴リングファイル」に綴じ、「**ルーズリーフパンチ**」であれば「ルーズリーフバインダー」に綴じます。前者は安価ですが穴が破れやすく、後者は高価ですが穴は破れにくいという長短があります。授業の解説をメモした「ルーズリーフノート」も綴じれば、これだけで復習が可能です。

□ 筆記具：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

万一忘れた場合には、受付に申し出れば一セット借りられます。

□ 辞書：英和辞典(電子辞書可) 和英辞典(電子辞書可) 英英辞典(電子辞書可 高2頃から)

授業中に辞書を引いている時間はありません(演習時の辞書使用を禁止)ので、授業前に自習をする場合にのみ必要です。

▼ お勧めの英和辞典

学校で指定の辞書がある場合にはそれを使いましょう。自身で選ぶ場合には、以下のことを参考に選ぶと良いでしょう。

◇ 身の丈に合った辞書を

中学に入って英語を学び始めた新中 1の方が、高校生用の中辞典を使っているのを目にすることがありますが、あまりお勧めできません。入門時にはそれ用の辞書を使ったほうが、辞書に馴染みやすいですし、辞書を使う効用も早く実感できることでしょう。一通りの文法項目が学習し終わった(**Gnoble** 生なら中2の夏以降)頃、なじんだ入門用の辞書が物足りなく感じてきたら、中辞典への変更を考えましょう。

入門用としては、「ジュニア・アンカー英和辞典(学研)」「初級クラウン英和辞典(三省堂)」等がお勧めです。

◇ 新しい辞書を

辞典市場では各出版社が競争していますので、今も生き残っている辞書は良い辞書と言えますが、2017年4月時点でお勧めの中辞典は、「ジーニアス英和辞典 第5版(大修館)」「ウィズダム英和辞典 第3版(三省堂)」「オーレックス英和辞典 第2版(旺文社)」「スーパー・アンカー英和辞典 第5版(学研)」「ライトハウス英和辞典 第6版(研究社)」です。電子辞書を購入する際にはこれらを収録しているものを選ぶと良いでしょう。

◇ 家では紙の辞書を

電子辞書は携帯するには便利なのですが、「画面が小さい」「用例を読むのにボタンを押さなければならない」等、不便な面もあります。「訳語だけを探して、良さそうな訳語を適当に当てはめる」という辞書の悪い引き方が身に付いてしまうことにもなりかねません。自宅の机では紙の辞書を引いて、じっくり読むことをお勧めします。

② **Gnoble** の英語教材

□ 通常授業テキスト：小ターム[G1ターム等]一回目の授業内で配付[高3生は毎回配付]

□ 季節講習テキスト：季節講習の一回目の授業内で配付[中3冬期、高1春期、高3は配付なし]

□ 演習プリント：授業最初に配付して演習～添削～解説

□音声教材[Gnoble Sound Laboratory(以下 GSL)]: 授業で「理解」⇒ GSL で「身に付ける」

学年ごとに設定されているパスワードを使って、Gnoble のウェブサイトから GSL をダウンロードし、^{音声トレーニング}Workoutします。そのためにコンピューターとインターネット環境が必要です。また、Workout するための音楽プレーヤーも必要です。通学時間にも^{聴き込み}Listening等が出来るように持ち運べるデジタルオーディオプレーヤー(例えば^{アイポッド}iPodや^{ウォークマン}WALKMAN)が良いでしょう。これらはスマートフォンやタブレット端末でも代用可能です。ごく最近まで「電子辞書」「デジタルオーディオプレーヤー」「携帯電話」の 3 台を持ち歩いていたものですが、今はスマートフォンかタブレット端末 1 台で事足ります。

2. 授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

▼中学生の授業の流れ

◇プリント演習 ⇒ ◇添削 ⇒ ◇プリントの解説 ⇒ ◇宿題の解説 ⇒ ◇新単元の導入 ⇒ ◇お帰り問題

◇プリント演習: 英作文・和訳・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

◇添削: 英作文や和訳などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。

◇プリントの解説: 添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。

◇宿題の解説: テキストの文法問題と読解問題(クラスにより異なる場合があります)を解説します。

◇新単元の導入: カリキュラムにある文法単元を、黒板を使った双方向の授業で説明します。

◇お帰り問題: ^{音声トレーニング}Workoutしてきた^{基本例文}Sentences for Workoutの定着度を確認するため、^{書き取り}Dictationしてもらいます。ちゃんと書き取れた方から授業終了です。

▼高校生の授業の流れ

◇プリント演習 ⇒ ◇添削 ⇒ ◇プリントの解説 ⇒ ◇宿題の解説 ⇒ ◇お帰り問題

◇プリント演習: 英作文・和訳・要約・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

◇添削: 英作文・和訳・要約等、記述式のプリントを回収し、その場で講師が添削をします。

◇プリントの解説: 添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。

◇宿題の解説: テキストの文法問題と読解問題(高1と高2は全クラス共通問題)を解説します。

◇お帰り問題: 高1は全クラスで、^{音声トレーニング}Workoutしてきた^{書き取り}読解問題の定着度を確認するため、GSLを放送してDictationしてもらいます。高2以降はクラス事情に応じて出題しています。

②日々の取り組み

▼宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなくてはなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは^{音声トレーニング}Workoutを継続しておこなうことにかかっています。

▽中学生の Workout: 小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継

続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための **Workout** ——

- ◇ **Listening**: 授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
- ◇ **Retention / Shadowing**: **Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさまねて発声する。
- ◇ **Reading aloud**: ④の Workout で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき5回。
- ◇ **Recitation**: ④の Workout の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき10回。
- ◇ **Dictation**: ④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがいないかを確認する。

以上の Workout が終わった後で、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているの、スラスラと解けるはずですよ。

▽高校生の Workout: 読解問題に関して、以下の Workout を行ってください。

- ◇ **Listening**: 授業で理解した GSL 対応の長文を題材にする。
 - ① 英文を見ながら音声を聞き、意味の切れ目を意識して目で英文を追いかける(慣れるまで)。
 - ② 英文は見ずに音声を聞く。聞き取れない箇所は、後で英文を見て確認する。全て聞き取れるまで繰り返す。(英語の耳が出来てきたら聞き取れているかの確認に **Dictation** をするのもよい。)
 - ③ 英文は見ずに音声を聞いたそばから **Shadowing** する。(①と②は電車の中などの時間も利用する。③は自宅では大きな声で、電車ではクチパクで。)
- ◇ **Reading aloud**: 授業で理解した長文を題材にする。気持ちを込めて、声に出して読む。目安は10回。一回毎に右のように印をつけてゆくと励みになります。



音読の効用は、具体的には以下の三点です。

- ① 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない(=右から左へのいわゆる「返り読み」ができない)ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。= 1回読んだだけで分かる力がつく!
- ② 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。= 速く読める力がつく!
- ③ 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているので、文法・語法・語彙が記憶に残りやすくなる。
= 英語力そのものが向上する!

③受講効果を上げるために

▼休まない・遅れない

英語の授業は中1から高1までは年間に49回です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題⇒授業⇒復習】のサイクルを生活に組み入れている方です。授業を休むと、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題…復習】の学習サイクル全てを失うこととなります。中学生であれば、新単元の導入授業も受けられなくなります。行事等でふだんお通いの曜日で受講できない場合は、振替授業に出席することを強くお勧めします。

数学科より

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

- **授業用ノート**：授業で学習する新規事項や演習で使うノートです。B5 または A4 サイズであれば市販のノートまたはルーズリーフどちらでも構いません。中1、中2のうちは図を正確に描く練習のために方眼が良いかもしれません。まれに小さいサイズのノートを利用している方を見かけますが、複雑な図を描いたり、多くの情報を書き込んだりすることに向いていません。
- **宿題用ノート**：宿題を自宅で解くためのノートになります。中1、中2のうちは宿題の提出が必須となります。**B5 または A4 サイズのルーズリーフ**をご用意ください（ノートはかさばりますので、ルーズリーフでの提出をお願いします）。中3以降は提出が任意となりますが、証明問題や考え方が複雑な問題が増えてきます。担当に添削をお願いする場合は、ルーズリーフで提出してください。
- **ファイルやフォルダ**：プリントやテキストを収納するためのものです。長く通うと教材が相当な分量になります。後で見直すためにも整理整頓を心がけてください。
- **筆記具**：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの。ただし、**必ず赤ペンは用意してください**（できれば、赤以外にもう一色あると便利です）。定規はあると便利ですが、フリーハンドで円を描く練習をしていただきたいのでコンパスは必要ありません。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

- **通常授業テキスト**：分野ごとに1冊ずつ分冊された形で配付[高3Eタームは配付なし]。
- **宿題用テキスト**：各タームに1冊（テキスト名「GKT」、年間3冊）。各ターム一回目の授業内で配付[中1、高3Eタームは配付なし]。（中1はテキストに宿題が付いています）。
- **季節講習テキスト**：季節講習の一回目の授業内で配付[高3夏期講習は例外あり]。
- **演習プリント**：クラスレベル、定着度等をふまえ必要に応じ、適宜配付。

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 授業の進み方

▼ 中学生～高校1年生、高校2年生理系(S系)[新規事項導入授業]

Gnobleでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、基本的に新規事項の導入時は以下のような流れで授業を行っています。

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習 → **新規事項の導入** → **演習** → **確認**

- ・ 新単元の導入→演習→確認

新規事項の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正し

く生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、担当講師が、演習中に教室を回り答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

・宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、毎回の授業で宿題を出しています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。

▼高校2年生文系(L系)、高校3年生(前期)[演習授業]

新規事項の導入後は、大学入試に向けた実践的な戦略を分野別に伝えます。これまでに導入されてきた事項を俯瞰的に捉え、体系化することにより、問題の要求に応じた解法を自力で選択できるようになります。以下の3点が授業の柱となります。

実戦的戦略の伝達・**授業内での演習とその解説**・**授業外での演習(宿題)の解説**

・授業外での演習(宿題)の解説

演習授業で宿題にした問題に対しては、『各自の解法について、日本語と数式や図で説明したもの』を『**Gnoble** セルフチェックシート』に記入し、提出してもらうことにしています。



このシートは、取り組んだ問題に対して「解けた」「解けない」ではなく、「どう解いたか」「なぜ解けなかったか」を適切な言葉で、ポイントを絞り、客観的に説明するためのものです。これにより、生徒自身が、戦略を自分のものにするかや理解できていることと理解できていないことを整理することにつながります。また、担当講師にとっては、生徒一人ひとりの現段階での数学力を具体的に把握できるため、参加している生徒に配慮した解説やアドバイスをすることが可能になります。この用紙を提出した上で授業に参加することで、授業が最も効果的なものになります。自宅で丁寧に書くことが好ましいです。

▼高校3年生(後期)[テスト演習による実践形式の授業]

実際の入試のような分野や単元にとらわれないテストセットを、制限時間を設けて解きます。例年、大問3・4題に対して、80分～100分程度で実施しています。解いた問題については、その場で解説し、答案は回収・採点・添削し返却します。得点力や答案の作成力を高めることも目的ですが、より実践的な問題で、各自が完成している戦略を確認・修正・補足することも目的です。

②日々の取り組み

・宿題への取り組み

中2までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。担当講師にとっては、宿題をチェックすることで、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきます。足りないと思われる部分については、再度授業で時間をとりますので、生徒の皆さんは、不足している箇所の復習や確認をすることができるのです。また、生徒自身も宿題に取り組むことによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

また、分からない問題にも時間をかけて取り組むことが大切です。分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

テストにおいて点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題への取り組み方で大きな差がでるのです。

・毎日数学にふれる

部活や学校行事等で忙しい日々を送っていることと思いますが、毎日「数学にふれる」ことを心がけましょう。学校の宿題でも構いません。大切なのは数の感覚、図形の感覚を損なわないことです。過去にとっても優秀な生徒が、短期留学で約1ヶ月間数学から遠ざかっており、帰国後、授業に合流したところ今までしたことがないような計算ミスや間違いを多発したことがあります（その後、今まで通りしっかり勉強していただきましたので、約1ヶ月でもとの状態に戻りました）。

Gnoble の宿題や授業内容の復習も一気に行うのではなく、数日に分けて行うのが効果的です。

③受講効果を上げるために

・「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

・きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。

まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

国語科より

【古文（高1もしくは高2）】

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□ プリント(お帰り問題)を整理・保管するためのもの

： ノート(A4サイズが便利)・バインダー・クリアブックなど

毎週 B5 のプリントを 2 枚(1 枚は書き込み用、もう 1 枚は保存用)配付します。それを適切に整理・保存する方法を自分で考え、実践してください。例えば、ノートを縦書きの向きにし、上のページにプリントを貼り、その余白や下のページにメモ・正しい訳を書き込んでいる生徒がいました。あるいは、穴をあけ、バインダーにはさみ、メモはルーズリーフに取る人もいました。

□ 筆記具：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

授業の板書をそのままの色で写すためには、蛍光ペン(黄色)、ピンク・オレンジ・青・緑のペンが必要ですが、全てを合わせる必要はありません。

□ 辞書：古語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中には使用しません。宿題実施の補助としてのみ必要です。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの(α・α1同一教材です)

□ 通常授業テキスト：G1・G3・E1・E3・F1 ターム一回目の授業内で配付

□ 古文単語帳：G1 ターム一回目の授業内で配付(年度途中合流者は合流時配付)

□ 季節講習テキスト：季節講習直前1ヶ月間の通常授業内で配付[事前に予習(全訳)が必要]

□ お帰り全訳演習プリント：授業最後の演習、翌週までの添削、翌週授業での解説で使用

□ 復習問題：年度後半(Eターム・Fターム)の授業内で配付、過去学んだ内容の確認

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 授業の進み方

▼ 古文の授業の流れ

前回の全訳演習プリント、返却と解説① ⇒ 古文単語学習② ⇒ 宿題の解説③ ⇒ お帰り全訳演習④

*Eターム・Fタームには、過去扱った内容の定着度確認の「復習問題」も実施。

*Fタームには、お帰り全訳演習の代わりに入試問題を演習

・前回の「全訳演習」(プリント)、返却と解説①

担当者が得点をつけ、返却します。添削はあえてせず、誤っている箇所の指摘のみをした状態で返却するので、授業内で不明点・疑問点を解決しましょう。解説では黒板に本文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして、一語一語を疎かにしない緻密な解釈を提案します。ただし、講師が一方的に解説するだけではなく、どうすれば正しい解釈になったかを各自に考えてもらうようにする、「説明し尽くさない解説」を心掛けています。

文法に関する発問も頻繁にすることを通じて、長文の中で文法知識を理解・定着させることを目指しています。

授業を最大限に活かすには、自分が指名されているときも、そうでないときも、当事者意識を持ち、主体的に参加することが期待されます。

・古文単語学習^②

オリジナルの「古文単語帳」を使用し、毎週7つずつをメドに解説していきます。どういう漢字をあてるか、どういう語源・イメージが存在するかを解説しますので、単純暗記にならないように工夫しましょう。

・宿題の解説^③

お帰り全訳演習と合わせ、宿題テキストを読み解くことで、演習量・読書量を確保しています。有名出典に触れ、古文の背景知識・常識などを活きた形で学べるように授業を展開します。

・お帰り全訳演習^④

標準的な実施時間は、約15分程度です。納得いくまで取り組んでもらい、提出してもらって授業は終了です。前期は助動詞活用表や過去のノートの参照も許容します。「来週の解説を聞けばいいや」と投げ出さず、どうすれば解決するかを自分で考える姿勢を確立してほしいと思います。毎年、粘る子は伸びます。機械的で、応用のきかない形で暗記をするのではなく、実際に使いこなす中で古典文法をマスターできるからでしょう。難しい課題ですが、答案提出時「どうしてこんなにできないのだろう」と悩み、落ち込んだり悔しがったりする体験も重要だと考えています。

②日々の取り組み

▼宿題と復習

▽古文の宿題

集中して取り組めば、15分程度で終わらせる程度の全訳を宿題にしています。(お帰り全訳演習よりも難易度は低めです。) 原則として辞書は用いずに取り組み、最後の最後で、自分のメド付けは正しかったか確認する程度にとどめるべきです。古文の場合、どこかで訳を調べ、宿題をやった体裁だけを整えるということもできてしまうかもしれません。また解決法として辞書を引くことも重要ですが、調べると該当部分そのまま出ていることもあるでしょう。それを「ラッキー」ととらえるか、意味がないと考え、多少時間をかけてでも、自分なりの訳を模索するか。後者を選び、果敢に挑む姿勢が重要です。

▽古文の復習

古文の復習は、理解度や復習にかけられる時間に応じて、以下の3段階の方法を提案します。

①簡単な復習

授業を集中して聞いていれば、授業を受けた日の寝る前、翌週の授業開始前の時間などに、「復習用の白紙プリント」を眺めるだけでも十分に意味があります。「あれっ、この部分は何だったっけ?」と感じた部分に付箋を貼るなどしながら読み返し、書き込み入りの授業プリントの方を見て疑問点を解決します。1回音読しておく、単語の区切り目などが意識化されて、より良いでしょう。

②授業定着プリント

授業時に配付している、授業定着プリントを実施します。文法や単語の観点から、復習ができるようになっていきます。(解答は配付していません。授業中のメモをもとに答え合わせをします。) 授業中、理解できていなかったり聞き取れていなかったりした部分が見付かったら、担当に質問しましょう。

③訳し直し

お帰り全訳演習やテキストの本文をもう一度全訳します。この「訳し直し」は、夏休みや冬休

み、年度末などの機会に行うのも効果的です。高校1年生には、2年生の1年間を使って、じっくり訳し直し・復習を行うよう提案しています。

【現代文（高2のみ）】

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□ 筆記具：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

□ 辞書：国語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中には使用しなくても構いません。宿題復習の補助として使用しましょう。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

□ 通常授業テキスト：小ターム一回目の授業内で配付

□ 季節講習テキスト：季節講習初日の授業内で配付[事前予習など不要]

□ 導入プリント(B5 シリーズ)：授業冒頭を実施する、読解(Gターム)・知識(Eターム)プリント

□ 漢字プリント(B5 シリーズ)：Gタームにお帰り問題として実施。漢字学習に加え、教養的な知識を補完できるような内容になっています。

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 授業の進み方

▼ 現代文の授業の流れ

導入プリント^①⇒ 宿題の解説^②⇒ 授業内演習の実施^③⇒ 授業内演習の解説^④

▼ 現代文の授業で意識して欲しいこと

現代文は、単に量を解けば良いというものではありません。一題一題、いかに濃密な学びを得るかが重要です。グノーブルの授業では1回の授業で2題を読みますが、その2題からできるだけ多くのことを得て、次回以降の演習に生かすつもりで臨んでもらいたいと思います。

同じ文章が出題されることはほぼありませんが、以下の2点は普遍的に通用します。

① 解法

② 教養

①に関して。我々は大学受験に向けた指導を行うのですから、もちろん、目の前の問題を解くための具体的な過程をお伝えします。いわゆる「フィーリング」で終わらず、確実に正解するための読み方・考え方を説明しますので、テキストや解答用紙の余白などにどんどんメモを取り、正解に至るプロセスを後から自分で再現できるよう、努めてください。なお、解説を聞く際、自分で書いた答えを全く捨ててしまっ、単に模範解答を書き写すことに終始する人がいますが、時間の許す限り、模範解答と自分の相違を比較検討するようにしましょう(追い付かなければ、復習の際にでも)。授業は、講師の美しい解法を堪能する場ではありません。自分自身が解けるようになるためのヒントを吸収する機会です。

②に関して。特に G タームにおいて、近現代を読み解くための重要トピックを幅広く取り上げています。しかし、いわゆる「時事問題」を知っているという蘊蓄レベルでなく、著者の視点や論理を自分自身のものとして使いこなせる水準を目標とし、扱う文章を血肉にしてもらいたいと考えています。そのための媒介者として、授業担当者が存在しています。解説を手掛かりに、実感

のある理解を目指しましょう。自分で具体例を出したり、授業後に要約を試みたりすることが理解度のチェックになります。

②日々の取り組み

▼宿題と復習

▽現代文の宿題

30～60分程度で取り組めるようなテキストの問題を毎回一題出題しています。ほぼ記述式ですので、自分の納得いく答案が書けるまで推敲しましょう。なお、問題を解いていないのに解説授業だけを聞いても、ほぼ意味がありません。必ず、実施しましょう。

▽現代文の復習

現代文の復習は、以下の3つの観点から行ってください。

①語彙

「意味があいまいだ」「書き取りを聞かされたら答えられないだろう」と思われる単語を、本文から選び出します。読み仮名や意味を調べ、テキストの余白や語彙ノートにまとめておきましょう。その際、「認知語彙」と「使用語彙」という2種類の語彙を意識すると良いと思います。認知語彙は文章の中で出てきたとき、わざわざ辞書を引かない、つまり、何となく意味が分かるような水準の単語のことです。使用語彙は、自分自身が文章や会話の中で使いこなせるものです。使用語彙は認知語彙の数分の1だと言われています。知らなかった言葉(認知語彙でないもの)だけでなく、ちょっと自信のない言葉(認知語彙には含まれるが、使用語彙ではないもの)も調べるようにすると、実戦力が高まります。

なお、センター試験(評論)の演習を行った際には、問1の漢字問題の選択肢は全て漢字を書いてみましょう。

②解法

特に自分自身が間違った問題を中心に、正解を導き出すプロセスを言語化しておきましょう。記述問題においては、「模範解答の根拠となっている本文記述はどこか」「模範解答で表現が工夫されているのはどこか」「自分の解答をどう直せば満点に近づくか」などを考察します。また、選択肢の問題では、ダミーの選択肢の誤りを指摘します。

日本語が母語である場合、現代文の演習の際には、方法論やテクニックを意識せずに取り組んでいる生徒が多いものです。しかし、その日常的・無意識的な読解だけでは、行き詰まってしまうことがままあります。そのときに、日ごろ言語化したノウハウが助けになります。

③要約

見開きの文章(B5で2頁)を100字前後にまとめるつもりで、要約に挑戦すると良いでしょう。文章全体の構造を考えたり、実感を持って理解したりする、良い勉強の機会となります。不明点が出てきたり、要約答案を見て欲しかったりするときは、授業担当にご相談ください。また、もとの文章を短くまとめようとする努力の中で、熟語の語彙を増強することにも役立ちます。

▼読書

語彙力・読解力、思考力、教養の下支えとして、特に高1・高2の間にこそ、読書をして欲しいと思います。学校や塾の現代文で面白かった文章は、もとの本や同じ書き手の本に当たって欲しいと思います。また、日本人としての教養としても、熟語語彙の増強のためにも、夏目漱石などの近代文学に触れて欲しいという思いも強いです。

ただ、それ以上に、この時期には、大学で学びたいと思っている分野と関わりのある読書を推奨します。

まずは、中高生向けに易しく書かれた岩波ジュニア新書(ただし、書き手は一流です)の中で、興味のある分野の本を探してみてもいいでしょうか。社会科学系であれば、有斐閣アルマなど、大学の入門授業で使われるような本に挑戦してみても良いでしょう。自然科学分野に進む人は、Newton 別冊や講談社ブルーバックスなどを読むことで、高校の科目の枠組みを超えた視野を得られるのではないのでしょうか。

(参考) 受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- 東大……………理系でも二次試験まで必要
- 東工大……………二次試験、国語無し。センター試験では受験するが、センター試験の重要性が著しく低い
- 国立医学部…二次試験に国語があるところは東大・京大・名古屋大・山形大のみだが、センター試験で高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのように必要であるかを調べるのが相当に重要です。

こうした入試制度を鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

高1…古文 [春期講習からの通年講座、1年間完結]

高2…現代文 [春～12月] (文系、東大・京大志望の理系)

古文 (高1で未履修の者) [春期からの通年講座、1年間(もしくは春～12月)完結]

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講

※新高3(高2)の冬期講習に「小論文入門」開講

※新高3(高2)の1～2月に「古文Fターム特別講座」(高1・2で未履修の者向け)開講

高3…志望校別の対策 [春期講習から直前講習で完結]

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、2次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※夏期講習と冬期講習に「センター国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる(関わりそうな)場合は、高2までに古文の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。